

木曾駒ヶ岳

【日程】 2017年8月12日～2017年8月13日

【エリア】 中央アルプス

【形態】 ハイキング

【メンバー】 Y尾、I藤、K岡

【報告】 K岡

《ルート／タイム》

8月12日

奈良発（5：00）～京奈和/名神/中央～伊那 I/C～桂小場（10：25/10：45）～
大樽避難小屋（13：40/14：00）～西駒山荘（16：30）※行動時間：5H45

8月13日

山荘（4：30）～木曾駒ヶ岳（7：30/8：00）～西駒山荘（10：10/10：35）～
大樽避難小屋（12：15/12：40）～桂木場（14：35） ※行動時間：10H05
垂直標高：1677m 累積標高：2300m 合計行動時間：15H50（ヤママップデータ）

《報告》

(1) プロローグ

新田次郎の晩年のノンフィクション山岳小説に「聖職の碑」がある。大正二年八月二十六日、中箕輪尋常小学校生徒ら 37 名が修学旅行で木曾駒ヶ岳に向かった。しかし、天候が急変、嵐に見舞われ校長含め 11 名の死者をだした。この遭難事故を主題にした小説である。駒ヶ岳を望む将棋頭山の稜線に花崗岩の自然石の大きな遭難記念碑が立ててある。数年前にこの小説を読み、いつか自分の足でこのコースを辿ってみたいと思っていた。



遭難記念碑から見る宝剣と中岳



将棋頭山の尾根の遭難記念碑

(2) 概要

8月12日

登山口は小黒山(1564m)に源流をなす小黒川沿いの桂小場にある。伊那市の中心街から約10キロ西である。

お盆休みの渋滞を心配して奈良を5時に出発。10時25分に着いたのだから渋滞による遅れは殆どなかった。途中激しい雨脚でワイパーをフルに上げてても前方がほとんど見えないぐらいの時もあった。雨もあがり登山口に着くと十台ばかり駐車していた。

準備をして、さあ出発しようとした時、隣の車の横に新しいペットボトルと車のキーが落ちているではないか。少し前に出発した男性のものに違いないと、この時間からでは今夜は同じ山荘であろうと判断して持っていくこととなる。

すぐに落葉松林の樹林帯の登山道となる。緩やかな勾配に昨秋の落葉松の落葉した登山道の柔らかい感触が伝わってきて歩きやすい。暫く、九十九折れに道が続く。今にも雨が降りそうな空からぽつぽつ降りだし、やがて、土砂降りの雨となる。昼食を済ましていたのがせめてもの救いである。

本降りの激しい雨脚の中を合羽も着けないで男性が降りてくるのが目に入る。近くになりその男性が駐車場で先に出発した男性であることが分かった。キーの紛失に気づき降りてきたのか、と思い話しかけるがどうもそうでなかった。この雨は俄雨で明日は天気が良くなるなど話していると、気を取り直して雨具を付け我々と同行することになった。しかし、大樽の避難小屋まで来て休憩していると、やっぱり、今日は下山すると言って一人で降りて行った。

車のキーやペットボトルのお礼も言わないで帰って行ったので一抹のわびしさがよぎる。そこから、本日の核心部の胸突き八丁の急登が約二時間続く。ペースが落ちて小幅な歩きになるが今日は終始トップを歩いているので落伍して遅れることはない。

胸突き頭まで来ると道はトラバース気味に等高線に沿うように高度を上げていく。まもなく、将棋頭山の広い鞍部に建つ瀟洒な山荘・西駒山荘が見えてくる。

伊那市の山小屋で築4年。こじんまりしているが新築同然、木の内装がびかびかで木のおいがするようで気持ちがいい。

本日は、伊那市の小学校の学童保育の生徒12名、引率の先生方5名と我々3名だけである。食事前に食堂でビールを飲み、学童保育の関係者と談話して過ごす。

夕食は美味しいカレーライス。食事を終えると、カレーを食べたお皿をキッチンペーパー一枚で拭き取り皿の美しさを競うコンテストがあったが我々三名はボトムの成績だった。

8月13日

翌日は4時半に出発。将棋頭山の腹を巻き南面に出ると、大小の花崗岩が散在した広い砂地で緩やかに下り勾配の尾根になる。その中ほどに高さ5~6メートルの高さのひと際大きな花崗岩があり「遭難記念碑」と大書してある。そして、前の右側に1.7メートルほどの花崗岩に同じく「遭難記念碑」の文字があり、遭難当時の状況と遭難者の名前が刻まれている。11本の蠟燭が供えてあった。

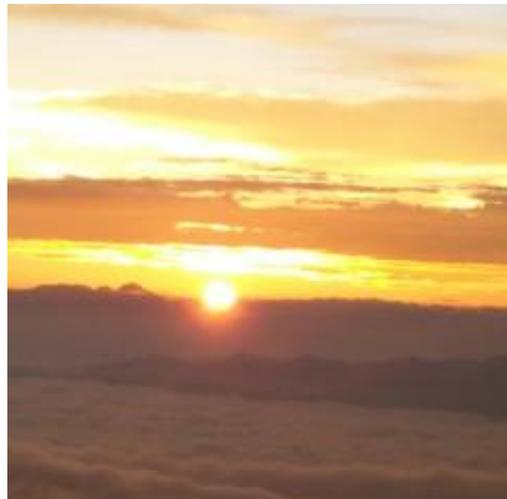
その場所から馬の背越しに、木曾駒が岳、宝剣の岩峰、手前に山小屋、左に伊那前岳の尾根が長く伸びているのが見える。遭難者が登りにきた山を望む絶好の位置に遭難記念碑が立ててある。一同手を合わせ拝礼する。

そこから暫くすると八合目の標識の分岐がある。そこで駒ヶ岳と宝剣山荘方面へとルートが分かれている。記念登山者は宝剣山荘方面へ進み翌日、下山時に遭難するが。本日はそこから馬の背尾根を駒ヶ岳へ直登する。花崗岩が点在する尾根は息がきれ歩行が緩慢になってくる。最後の力を絞るように頂上に辿りついた。

途中、お花畑というほどの高山植物の群生はなかったが白山フウロ、カニコウモリ、ヤマハハコ、イワツメ草などなど。花期を過ぎたチングルマの群生が印象的だった。



木曾駒が岳山頂でおどける三人組



北岳の右側からの日の出

今日のコースは静かであったが、頂上は沢山の登山者で賑わっていた。いつものように山座同定を楽しみ暫く休んで下山することとした。

念願のコースを終えて心地よい疲れとともに「聖職の碑」を再読したくなった山行だった。